



Title	博物館における地域連携活動の社会的効果：伊丹市昆虫館「鳴く虫と郷町」を対象とした実践事例から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	卓, 彦伶
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14624号
Issue Date	2021-06-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/82282
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yenling_Cho_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：卓 彦伶

学位論文題名

博物館における地域連携活動の社会的効果

—伊丹市昆虫館「鳴く虫と郷町」を対象とした実践事例から—

・本論文の観点と方法

本論文は、博物館における地域連携活動のあり方について検討し、博物館の地域連携活動が地域社会に及ぼす社会的効果とその意義を明らかにすることを目的としている。その調査対象として、伊丹市昆虫館の地域連携活動である「鳴く虫と郷町」を事例とした。

1970年代から、博物館における連携活動は生涯学習機関の文脈で展開されてきた。しかし、1990年代のバブル崩壊と地方分権の推進などの経営環境の変化に対応するために、2000年以降、日本博物館協会（以下、日博協）が「地域連携」を経営課題の解決策として打ち出した。それを実現するために、博物館の地域社会における存在意義を自ら表明するものとして「使命」の重要性が強調され、さらに博物館が常に地域ニーズや活動の成果を把握するために、評価の必要性が提起された。また、2015年には「文化芸術立国」のもと、文化芸術の社会的・経済的価値が注目され、博物館は戦略的に位置付けられるようになり、多様な主体との連携が求められるようになった。このような状況のなか、地域社会における博物館の果たす役割と価値について議論することは重要である。

本論文では、まず学会誌や調査報告書などを通して先行研究を吟味し、博物館の地域連携活動および博物館評価の現状と課題について把握した。その上で、伊丹市昆虫館の地域連携活動である「鳴く虫と郷町」を対象に、ロジック・モデルを構築し、事業関係者へのヒアリング、来場者へのアンケート、地域住民へのwebアンケート調査を通して1,788サンプルのデータを収集し、SPSSを使って統計分析を行い、地域連携活動の社会的効果を検証した。併せて、その意義を考察した。

・本論文の内容

第1章では、博物館学における地域連携に関する先行研究について整理した。2000年代以前の市民参加論では、これまでの博物館と市民の関係性を問い直し、博物館活動における市民の主体的な参加が提起された。また、2000年代からは博物館を取り巻く社会環境に対応するために、日博協が一連の調査報告を発行し、博物館における使命と評価の重要性を提起した。さらに、博物館経営の視点から地域社会との関係性に注目した地域連携活動のあり方について論じられるようになった。しかし、地域連携活動を通じた、地域社会における博物館の存在意義については十分に議論されていないことがわかった。

第2章では、博物館における連携活動が求められるようになった政策的背景を把握した。2000年以降の政策において、ボランティア活動の位置づけが変化し、ボランティア活動の振興や導入に関する記述がみられなくなった。その背景には、自治体の財政難や文化施設の運営課題に対応するために、地域住民の主体的な参加が政策の中で強調されるようになり、ボランティア活動が市民の社会参加活動に内包されたことがあると考えられる。また、「博物館の望ましい

基準」の二度の改正および「文化芸術立国」政策のもと、博物館の連携対象が拡張された。これまでの社会教育施設として生涯学習の機能を発揮した上で、博物館は地域の拠点となり、地域のあり方や社会的課題解決の方法など社会的な役割が求められるようになった。

第3章では、博物館学の学会誌と日博協による調査報告書をもとに、連携活動の動向について「博物館内部」、「博物館相互間」、「博物館外部」との連携に分類し、検討した。その結果、博物館外部との連携は一定程度行われているが、地域の実情や博物館の特性によってそのあり方が異なるため、具体的な連携方法の提示が困難であることを指摘した。

第4章では、博物館における地域連携活動のあり方について、事例分析を通して検討した。その結果、地域連携活動を目的によって4つに分類した。そのうちの1つである「非来館者層への波及効果」は地域社会への広がり志向した連携であり、博物館の機能がいかに発揮されるかについて注目する必要がある地域連携活動であるとした。一方、使命に基づいた検証を行っている館がまだ少なく、活動成果の評価手法について、来場者アンケートを用いた事例はあるものの、利害関係者への効果に関する検証は行われていない現状が明らかとなった。

第5章では、行政評価の現状と課題を踏まえ、近年の政策立案においてエビデンスの質を重要視する流れ、および評価手法として活用され始めているロジック・モデルについてまとめた。その上で、博物館における評価実施の現状と課題について明らかにした。行政評価で用いられる業績測定型評価は、評価結果が事業の改善につながらないという課題が指摘されている。この課題とエビデンスに基づき政策立案を推進する国の動きとが相まって、地方自治体でも施策や事業の因果関係を検証した結果（アウトカム/インパクト）をエビデンスとして事業改善に活用し、そのなかでロジック・モデルが使われるようになった。また、博物館における地域社会に対する効果の評価は、経済的効果に関する手法は試行されているが、社会的効果の評価はまだ少ないという現状が明らかになった。

第6章では、伊丹市昆虫館の地域連携活動「鳴く虫と郷町」を事例とし、関係者とともにロジック・モデルを構築し、その社会的効果の検証を行った。具体的には、ロジック・モデルにおける長期・中期・短期アウトカムの項目ごとに、それを評価するための指標を設定し、事業関係者へのヒアリング、来場者へのアンケート、地域住民へのwebアンケート調査を通してデータを収集した。そのデータを分析した結果、事業目的である「地域の人々に秋のおとずれを楽しんでもらう」「地域の良さを再認識してもらう」「地域の人々の交流をうながす」がどの程度達成されているかが判明した。併せて、地域の人々の「鳴く虫と郷町」に対する認知、伊丹市昆虫館が事業を通して得られた成果も明らかとなった。

終章では、本研究の結論および今後の課題を述べた。博物館において行われる、4つに分類した地域連携活動の現状とあり方から、博物館に還元される効果および地域社会への波及効果を明らかにした。併せて、博物館は地域連携活動によって、地域社会に社会的効果を及ぼすことを実証的に示すことができた。そのことは地域社会での博物館の存在意義を増大させ、地域連携活動による成果の検証は、博物館使命の明確化に寄与すると結論づけた。最後に、今後の課題と展望として、地域連携活動に関する事例の調査範囲や博物館の規模、館種による差異などを考慮し、さらなる事例検討を行う必要性を挙げた。併せて、今回明らかになった「鳴く虫と郷町」の社会的効果を踏まえ、この活動はこれに関わる人材をより多く発掘し、市民活動を幅広く育てていく可能性があることを、主催する組織にフィードバックしていくことが今後重要であるとした。